夢幻系列

漱石・龍之介・百閒

高橋英夫

小沢書店

夢幻系列

漱石・龍之介・百閒

高橋英夫

小沢書店

夢幻系列　漱石・龍之介・百閒　　定価2500円

平成元年2月20日　初版発行

著　者　高橋英夫
発行者　長谷川郁夫
発行所　株式会社小沢書店
東京都千代田区飯田橋 4-2-2　Tel.（03）263-9218
印刷　第二整版　　製本　大口製本

© H. Takahashi, 1989　　Printed in Japan

夢幻系列　目次

夏目漱石

漱石の言葉と文体　9
初期漱石の文体——写生文との関連で　23
表現言語の成立——『吾輩は猫である』　39
俗なるものと美なるもの——『草枕』について　72
夢における思弁と寓意——『夢十夜』について　93
『三四郎』の構想と方法　107
漱石と則天去私　124

芥川龍之介

芥川龍之介における終末観　143
芸術家の運命——『傀儡師』について　157

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

『秋山図』について　170
人生のわずかな時間　173
内田百閒
夢の系列　179
胸苦しさの文学　194
自意識と関節はずし　208
みそっかすと形式主義　220
あとがき　225
初出一覧　227

夢幻系列

漱石・龍之介・百閒

夏目漱石

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

漱石の言葉と文体

I

汗牛充棟という形容は漱石に関する研究書、文献にもあてはまる筈であるのに、漱石の「言葉と文体」の研究は寥々たるものでしかない。これは、漱石研究の諸領域のうちでも、一番閑却されてきた領域なのかもしれない。たまたま目を通すことを得たその種の幾つかの論文も、事の本質には少しも触れていなかった。もちろんこれは、漱石には言語的問題の注目すべきものがない、ということを意味するとはとうてい言えない。むしろ、言語論的アプローチが欠落したような状況のもとで、厖大なエネルギーが漱石研究に費されつつある事態は、今日、漱石に寄せられている関心や再評価に、ある種の偏倚があるからではないかという懸念をおこさせる、と言っておいた方がよい。

文学者として、鷗外と共に代表的な明治の精神の座に就けられてしまったのが漱石であ

る。したがって今日漱石を語るとは明治という時代を語ることであり、西洋と対決して何らか己れの位置と思想を劃定してゆかねばならなかった近代的人間を語ることになってしまった。こういう広義の時務論的要請が無言の圧力となった結果、漱石の文体論、言語論が容易に成り立たなくなっていると思われる。しかし『吾輩は猫である』を読んで、全く漱石そのものである文章の風味、匂いを感じない人はまずいない。『吾輩は猫である』とはまるで異質な作品『道草』や『明暗』にしても、即物的には、何よりもまず漱石が形づくった彼ならではの言語として存在していることを、疑う理由は全くない。漱石には言語的問題が欠けているのではなくて、言語という視座からは漱石的問題がとらえられないとするような方向づけが、無意識裡に行われてきたにすぎない。

ごく普通の見方をしてみると、漱石の言語と文体について広まっているのは、第一に、彼が明治文士のなかでも有数の、屈指の文章家だったという通念である。この名文家は、凝っては『草枕』ふうの、また時には『虞美人草』ふうの美文家にさえもなり得た。この点について異議を唱える人は少ない。それはまた彼の発想の豊かさ、語彙の華麗さとも言えるものである。同じ「江戸っ子」でありながら漱石にはほとんど関心が無さそうな小林秀雄も、かつて『現代作家と文体』(昭和十二年)の中で「初めから花袋的革命に無関心であった二つの巨大な文章天国、漱石と鷗外」と述べて、漱石の語彙の豊饒を認めていたのが思い浮ぶ。

しかし第二には、一般に信じられているように、漱石の文体は和文脈であるよりは漢文脈である、と言う点がある。そして漠然と感得されていたこの感じをはっきり述べて、常識として定着させた最初のものは、あるいは谷崎潤一郎の『文章読本』であったかも知れない。谷崎は、森鷗外が源氏の文章に疑問を呈したことを紹介して、和文脈と漢文脈の区別を設け、和文脈の代表例として鏡花、上田敏、三重吉、里見弴、久保田万太郎、宇野浩二らの名前を挙げ、漢文脈系として漱石のほかに志賀直哉、菊池寛、直木三十五らを挙げた。そういう谷崎自身は前者を以て自認しており、それを換言して前者と後者の対比は、流麗派と質実派、女性派と男性派、情緒派と理性派、源氏物語派と非源氏物語派というふうにも言い表わしていた。

漱石における漢学的根差しは、近年吉川幸次郎氏の『漱石詩注』（岩波新書、昭和四十二年）によって有力な裏付けを得、さらに最近では、山本健吉氏『漱石　啄木　露伴』（文藝春秋、昭和四十七年）という労作を通じ、生きた問題として復活しつつある。

漱石が名文家、文章家であったこと、その文体は漢文脈に属していたことは、すでに常識といえる。問題はその先からはじまる。谷崎潤一郎は漱石とは文学的嗜好を異にするにもかかわらず漱石に言及したのであり、漱石の文章特性を認めるには吝かでなかった。谷崎にはまた、最も初期の批評文に『「門」を評す』（「新思潮」明治四十三年九月）というのもあって、その中ではきびしい作品評価を下しているにもかかわらず、結果的には漱石のよ

き読者の一人であったことだけは明らかである。

ところが、谷崎の『文章読本』にならった川端康成『新文章読本』と三島由紀夫『文章読本』は、漱石の完全な無視において、一つの特色を見せているのはなぜだろうか。これは、明治の自然主義から大正の心境的私小説へ、そして昭和の「純文学」へという流れを正統と意識しながら堅持され、形づくられてきた文壇というものが、漱石をその圏内に取り込みえなかった事情を、間接的に物語っているように見える。漱石がいわゆる文壇とは別の場所にいたという問題は、ほかにも考えうる幾つかの理由の上に重なりあう形で、漱石の文章、文体に非文壇的なものがあったためであり、つまりはそれも言語的理由に発していたのだ、と想定してみたくなる。

三島由紀夫は雄勁な漢文脈のお手本をあげるときには、先ず鷗外を以てした。三島の文学観からいってこれは至当だったが、漱石的な漢文脈という一つの質が、そのために迂回されたか、無視された結果となったのは否定できない。川端康成も三島由紀夫も、華麗な文藻の妙を例示しようとすれば、紅葉、鏡花に拠るとか、あるいはもう少し後の世代の久保田万太郎、里見弴をもちだすとかするふうであって、この面でも漱石は取上げられてよい文体と言語をもっていたにもかかわらず、視界の外におかれた。一方、こういう華麗な文章に対比的に、自然主義的リアリズムの極致として、しばしば言及され、引例されているのが「いぶし銀」のような徳田秋聲であるという事実も、漱石の文章が文壇の中で受け

た――あるいは、受けなかった――評価の微妙な反応を傍証している。

漱石の文章では、いたるところに彼独自の用語、比喩が用いられ、漱石くささを発しているが、それらはまた同時に、文章の流れのなかでの「字眼」の役割を果すこともあった。自然主義は文章から一切のつやを消してゆき、渋い、光沢なき光沢を求めた。鏡面や鉱物質が反射する光ではなく、障子や古びた木の家具が漂わせる、光というほどにもない光を表現しようとした。そういう狙いを正統として据えた文壇意識にとって、漱石の文章は、その中に多数はめこまれた字眼のぎらぎらしい輝度によって、不純に見えたにちがいない。『吾輩は猫である』や『坊つちやん』の大衆的人気を文壇的に理由づけようとするとき、問題はそういう漱石の文章の「通俗性」というところに帰着してゆくのである。

この点を、漱石への理解と敬意を失うことなしに的確に語っているのが宇野浩二である。宇野浩二の『小説の文章』は彼の全集に収録されていず、一般に注目されてはいないと思うが、創藝社の「近代文庫」本として昭和二十八年に刊行されている。この本は、谷崎、川端、三島の文章論が、結局のところ文学的エリートの自覚に支えられた堂々たる論陣を成しているのに比して、陋巷にあって文章の味に舌なめずりしているような感じがする。そこに自ずと別種の風格さえ生じているのだが、その中で宇野浩二は『吾輩は猫である』の冒頭の一節を引用したあと、次のように語っている。

さて、右の文章だけで云ふと、文章が、一つ一つ、コンマで切らずに、ピリオドで切つてあるので、短くて、きびきびしてゐるから実に読みよい。しかし、きびきびしてゐるのは、短く切つてあるだけでなく、作者の頭が明晰であるためである。それから、右の文章の中で、「ニヤアニヤア泣いてゐたことだけは記憶してゐる。」とあるところでも、最後の「記憶してゐる。」を「覚えてゐる。」と書けば、ただ「記憶し」と「覚え」だけの違ひで、文章の味が全く違つてしまふのである。さうして、かういふ独得な言葉の使ひ方は、漱石の発明で、漱石の小説の中には到る処に出てくる。例へば、『それから』の中の、かういふところである。

父は長い説法の中でそんな事も云つたが、代助にして見れば、自分は職業の為めに汚されない、内容の多い時間を持つてゐる上等人種だと考へてゐるので、父の小言を聞いても例に依つて発奮しようなぞといふ気は少しも起らなかつた。

つまり、右の文章では、「内容の多い時間」、「上等人種」などである。

明快な説明で、この上何も言うことはないようなものだが、「覚えてゐる」でなく「記憶してゐる」と書かれたときに発生するのは、たんにユーモア、諧謔といったものだけで

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo